

「音楽と非人間」第3回

九州大学芸術工学部 2024年度コンサートシリーズ

7/21(日) 16時開演

プログラム

第1部：雅楽の古典曲

《平調調子》
《陪臚》
《太食調入調》
《越殿楽》

第2部：現代曲

ゼミソン・ダリル：《デスカント (I)》より〈申の刻〉(2020)
リッカルド・ヴァリニ：《母への手紙》(1991)
ジョン・ケージ：《One⁹》(1991)
アフロ・ブラジル民謡(ジョン・コルトレーン編)：《オグンデ》(1967)

アフタートーク

ファビオ・ランベッリ, ゼミソン・ダリル

演奏者：ファビオ・ランベッリ(笙)

ファビオ・ランベッリはカリフォルニア大学・サンタバーバラ校の教授(日本の宗教・文化史)である。彼は、密教と神道の記号論、物質性、儀礼体系について、特に日本の宗教史における超人間的な次元に焦点を当て幅広く刊行してきた。現在は雅楽の思想史について研究を行っている。彼は笙と竽を演奏し、豊英秋ぶんのひであきと真鍋尚之まなべなおゆきの両氏のもとで学んだ。CDには、彼のデュオであるNeo Archē(笙・雅楽琵琶)による『Pearls』(2023年)、『New Heritage』(龍笛・箏・笙、2023年)、フリースジャズにおける笙の可能性を追求した『The Turning Point』(笙・ドラム、2024年)などがある(いずれも Edgetone Recordsからリリース)。

ファビオ・ランベッリは笙《ほり出し》(19世紀初頭)と笙《沙州まる》(2017年)で演奏する。

後援

九州大学芸術工学研究院

本研究は JSPS 科研費 23K00215 の助成を受けたものです。

解説

笙は非常に古い楽器で、25世紀前もの原型の遺跡が発見された。現在の形は、8世紀に中国から日本に伝来し、それ以来ほとんど形を変えていない。長い間雅楽レパートリーの一部でのみ使われ、1980年代から日本だけでなく世界中の現代音楽の作曲家を惹きつけるようになった。

笙は音楽の非人間(あるいは超人間)的な次元を探求するにあたり、うってつけの存在である。笙は、中国の古代神話に登場する原初の神の一柱である女媧が、鳳凰の鳴き声を聴いて感動しそれを忠実に模した楽器を作ろうと決めた。そのために女媧じよかは特別な竹を採るために霊峰である崑崙山こんろんさんへ赴き、鳳凰の形をした楽器を作った。そのため、笙は人間が恣意的に作ったものではなく、神聖な存在である女媧の神意により神獣とその鳴き声を忠実に模し、霊峰で採取された材料から創造されたものである。女神によるオリジナルを再現し、伝統を守り続けるためには、人間の介入は制限されている。また、笙は道教の仙人と仏教の極楽浄土の楽器でもある。

この演奏会は、第一部では雅楽の古典レパートリー、第二部では現代曲から笙のための作品を演奏する。

《平調調子ひょうじょうのちょうし》は前奏曲形式で(平調は西洋音楽におけるE音ドリアン旋法に相当)、15世紀後半に書かれた楽譜に基づくが、恐らくその起源は数世紀前まで遡ることができる。平調は、西方、つまり阿弥陀仏の浄土を意味するため、しばしば仏教儀式で使われた旋法である。

《陪臚ばいろ》もまた平調に基づき、雅楽のレパートリーのなかで現存する最も古い楽曲の一つである。この曲は752年、奈良の東大寺大仏開眼供養で初めて演奏された。今回は、その独特な前奏曲(陪臚音ね取り)に先立ち、この曲の笙の部分を紹介する。

《太食調入調たしきちょうのゆうじょう》は室町時代に天皇や将軍に秘伝された秘曲である。太食調(Eミクソディリアンに相当)で書かれ、豊原家によって伝えられた笙のレパートリーのなかで最も貴重な楽曲の一つであったが、1400年代後半に廃曲となった。ファビオ・ランベッリによる復元は、遠藤徹、宮田まゆみの両氏からの助言に基づいている。

《越殿楽えてんらく》は、雅楽のレパートリー全体のなかで最もよく知られる、唯一の楽曲である。西暦5世紀頃に中国で作曲されたとも言われるこの曲は、現在では多くの神道の儀式の音楽となっている。今回は、東儀和太郎とうぎまさたろう氏が東京にある小野照崎神社の小野雅楽会のために沓越調いちこつちょう(Dミクソディリアンに相当)に移調した近年のバージョンを紹介する(関係者がこの演奏を許可してくださったことに感謝する)。《越殿楽》の前には、前奏曲の沓越調音取りがある。

第二部はダリル・ゼミソンの近作、笙と箏のための《デスカント (1)》より〈申の刻〉(2020年)から始まる。この曲は申の刻の始まるちょうどに、自然環境のなかで演奏される。コンサート当日の福岡であれば17:06である。

《母への手紙》(1991年)はイタリアの作曲家・リッカルド・ヴァリニによるあまり知られていない曲であり、感情や不在というテーマを探求している。

ジョン・ケージの《One⁹》(1991年)は笙の独奏のための90分を超える大曲で、ケージが亡くなる直前に作曲された。カオスとランダム性の介入を可能にしつつも、厳密な構造のなかで組み合わせられた全体的なサウンドスケープへの配慮、日本への情熱など、ケージ独自の音楽美学を見事に示している。今回はこの曲の一部を演奏する。

《オグンデ》は神々に捧げるアフロ・ブラジルの伝統的な歌で、ジョン・コルトレーンのバージョン(1967年)をもとに、ランベッリが笙のために編曲した。遠い音楽伝統から生まれたこの歌は、雅楽の古典レパートリー、そして人間以外と対話するその力と驚くほどよく共鳴する。